

# 親鸞の思想と部落解放（上）

廣 瀬 杲

この一文は、一九八六年九月十九日、京都商工会議所のホールを会場として、部落解放基本法制定要求国民運動京都府実行委員会が主催をして行っている「部落解放基本法を考える府民講座」で話した時のテープに基いて文章化したものである。きわめて粗雑なものであることは充分承知してはいるが、私自身にとり、新しい親鸞像に眼を開くための一歩としては、決して軽くない意味をもっている。『親鸞教学』誌上に発表させていただくのは、大方のご批判を仰ぎたいためである。

ただいまのご紹介にもございましたような役割（部落解放基本法制定要求国民運動京都府実行委員会会長）をお引き受けしていることですから、ここで、ごあいさつを申し上げ、そして皆様方の日頃のお取り組みに対して感謝の意を表すると同時に、非常に厳しい状況下にあります今日の部落問題を解決するために、部落解放基本法制定の要求を徹底して行っていかなければならないという時期に至っておることでございますので、より一層のお力添えをお願いするのが本来でございますし、もちろんその気持ちは十分持っておりますが、本日は、その私が、この府民講座の最後に何か話をするようにというご要望を受けておりますので、これからお話をさせていただくなかで、そうした気持ちをお汲み取り願えればと考えております。

ところで、私のお話をするテーマは「親鸞の思想と部落解放」ということであります。この講座でこれまでの先生方が「基本法を考える」ということで、それぞれのお立場からお話してくださいましたが、私の場合は、テーマをご覧になっただけで、すでにある違和感を感じになっていらっしゃるのではないだろうかという気がしております。

それと同時に、私自身も、こういうお席で親鸞の思想ということをはっきりと全面に出す形でお話するのは、今回が生まれてはじめてでございます。そういう意味では、一応、掲げました「親鸞の思想と部落解放」という講題が、本当にそういうふうな講題としてふさわしいのか、ふさわしくないのか、もっと別の表現で申しますと、部落解放基本法の制定要求という事柄に、私の本日お話ししますようなことが積極的な意味を持つのか持たないのかは、はっきり申しまして、今、私の心の中に結論は出ておりません。むしろ、お聞き取りくださる皆様方の中で、私の出したテーマが何らかの意味で部落解放基本法制定の持っている基本的な問題をお考えくださるうえで一つの目安とも申しますか、そういうことにもしていただければ本当に幸いでございます。そういう意味では、本日お話ししますことが、本当に意味を持つのか持たないのかということは、お聞きくださる皆様方に全面的にお任せをいたしまして、私の心に浮かんでまいりますことを私なりに整理をして、お話をさせていただこうかと思っております。

まず第一に、これだけははっきりと申し上げておくことが、私自身にとっての責任であろうと思っております。最初に申し上げます。それは親鸞の思想という事柄を私が何事か对象的に観察して、いわゆるそれを文献的に確かめていく学問対象といえますか、そういうものとして、私にとっては親鸞の思想があるということは第二義でして、むしろ、はっきり私が生きている生活の根拠が私にとっての親鸞の思想です。そういう意味では、いわゆる部落解放の課題に参画している私自身の生活の原理とでも申しますか、あるいは、もう少し積極的な表現を取って申しますと、行動の原理と申しますか、そういうことが、私にとりましての親鸞の思想です。

そういう意味では、親鸞の思想一般について何事かを本日ご紹介しようとはさらさら思っておりません。文字どおり

私が生きているその生活の根拠であり、したがって、生きるということの中で、そのことに初めて気づかせていただいた部落解放という課題にかかわって生きていく生活の原理であり、したがって、その行動の原理である。そういう意味として、私にとっては、親鸞の思想が位置づけられているということを、まずご了解いただきたいと思えます。

ということは、もっと単純な表現で申しますと、いわゆる親鸞がどのようなものを考え、そして、それが部落解放という事柄にどのように関係しているかということの説明を私はしようとは思っていません。そうではなくて、私が、部落解放という事柄にかかわって生きるようになった中から見えてきた私の親鸞観とでも申しますか、その私の親鸞観という事柄をお話させていただくことを通して、何かをお考えていただければということですので、私がこれから申し上げることは、親鸞という一人の鎌倉時代を生きた仏教者の像として過ちなきものであるとお考えいただけますと、時によると、いろんな問題がおこってくるかも知りません。しかし、私にとっては、これからお話を申し上げますような親鸞像が、私にとっての唯一の親鸞像であるということだけを最初に申し上げたいと思えます。

もう一つだけ申し上げておきたいことがあります。これは、極めて大胆なものの言い方で、時によると、私が誤っているということになるかも知りませんが、事柄は、たとえばいくばくかの間違いがあっても、やはりはっきり申し上げた中で間違いのご指摘を受けるならば、事柄がすっきりするのではないかと考えていますので、はっきり申し上げます。

それは、明治初頭から、いわゆる現代と言っている今日まで包んで日本の近代化の中で、日本人は、人間として非常に大切なものを見落としてきたのではないだろうかという気が切実にしているわけです。「ご維新」という言葉で表現されている大きな変動の中から西洋の思想を初めて受け止める形で近代化が進められてまいります日本の動きの中で、人間として非常に大切なことの見定めをしていくという一点が、かなり大きく欠落していたのではないだろうかという気が特に最近してならないわけです。その見落した大切なことは宗教であり、したがって、人間における

宗教性であったと、はっきり私は申しておきたいわけです。そういう意味では、宗教あるいは宗教性、「性」というのは人間における「倫理性」というような意味でつかわれる場合の「性」ですが、そういう宗教とか、あるいは人間における宗教性という事柄が確かめられていくという一点が、日本の近代化の歩みの中では、大きく見落されてきたのではないだろうかということが、最近特にひしひしと感じさせられるわけです。

ここにお集まりくださった皆様方に、宗教、仏教、信仰、信心という言葉は何の説明も加えないで申し上げたとき、それがスット生活感覚の中に溶け込んでいくでしょうか。おそらくかなり疎遠なものになっていくのではないかと思います。そのかなり疎遠なものになっていくことに対して、私はそのことの理由を考えてみなければいけないという気がしておるわけですが、ただ、疎遠になることによって、時によると、宗教、もしくは宗教性ということを経うとすると、それが、お聞きくださる個々の人々のそれぞれの意識の問題には立ち入らないとしても、日本人の意識総体ということで申しますと、どうしてもなじみにくい。したがって、かなり特定なことであるという意識が随分強く作用しているのではないのでしょうか。日本のインテリは無宗教であることをもって得意になっているということが、よく言われます。このあたりのことも念頭に置いておるわけです。

だからといって、近代を歩んできた日本人は、いわゆる宗教と呼ばれる事柄にかかわって何事も考えないし、何事もそれにかかわる意識を持たないほど強靱に非宗教的であるかという、そうではないのです。むしろ、宗教ということ、あるいは宗教性の確かめがあまりにも軽んじられたために、宗教あるいは宗教らしき事柄についてぎちっと峻別ができないという状況が、目を見張るような物質文明の発達の中で、また逆に驚くべき脆弱さをもって露呈してきているということが、しばしばおこると言っていると思います。

ざっくりばらんな話をしますが、例えば、宗教といったとき、それは、いろいろに難しく確かめはできませんが、感覚的なものの言い方をしますと、『鰯の頭も信心から』という言葉が日常の中でボンと出ます。それは、案外私たちの

現代の一般意識の中で『鰯の頭も信心から』という非常に素朴な言葉で「信心」という事柄が語られるということを中心として持っている生活は、どれほど緻密に詰めていっても、質としては、ほとんど変わっていかないのではないかと気がするのです。また『苦しいときの神頼み』、『さわらぬ神にたたりなし』とも言います。そういうとき何を念頭に置いているかというところ、苦しいときには、とにかく何でもいいから神と呼ばれる何事かに頼っていくことによって、苦しみを何とか回避できるのではないかと。しかし、回避してくれるであろうと思っている神なる存在は、何も事の起らないときには触れないでおく方が安全なのだという意識です。それが「宗教」という言葉の中で感じ取られている一般認識ではないだろうか、私はずっと考え続けておるわけです。

どうして日本人の近代化の中でそういうことがおこったのかという理由は、いろいろと考えることができると思います。またいろいろな側面があるでしょうが、私は、その中で、特にこの一点だけ本日は申し上げたいと思っております。

それは、日本の近代以前、もっとはつきり申しますと、徳川の幕藩体制下にあった日本という国の政治社会状況の中で、いわゆる仏教によって代表される宗教、今日は仏教とはつきり申しておきますが、その仏教がどんな位置づけをされてきて、どんな作用をしてきたのかということが、その前近代にピリオドを打って近代化を押し進めようとするときに、大きく宗教の本質を問うことを阻害したのではないだろうかと考えています。その内容については、本日はあまり具体的には申しませんが、言葉として、こんな言葉があります。「天子天台、公家真言、公方浄土で禪大名。乞食、日蓮、門徒それ以下」。これは、天台宗、真言宗、禅宗、日蓮宗、そして門徒宗という名で呼ばれている親鸞を開祖とする浄土真宗の六つの仏教集団が、それぞれ当時の社会制度の中に位置づけられているということです。天皇家にとって仏教とは天台宗、公家たちにとっては真言宗、将軍である公方にとっては浄土宗、諸大名にとっては禅宗、そして乞食と呼ばれるその当時の下層の人々のところで作用していた仏教が日蓮宗、そして、当時の社会組織の

中でそれ以下とされている人々のところで作用するのが浄土真宗であったという位置づけです。これを違う側面からいうと、天台宗は天皇家の宗教であり、真言宗は公家の宗教であり、浄土宗は將軍の宗教であり、禪宗は大名の宗教であり、日蓮宗は乞食と呼ばれる人々の宗教であり、門徒宗（浄土真宗）はそれ以下の人々の宗教であるということです。

私は今、このことの内容に触れようとするのではなくて、少なくとも仏教それぞれが、それぞれの教理なり、教義なりに立って一つの主張をしていく宗派を形成していきます。その宗教であるはずの仏教の宗派が、そのまま徳川の幕藩体制という社会制度に組み込まれてしまっているということなのです。そのことの持っている意味は、そこでどんな作用をしたのかということ、私は今、あえて問題にしません。おそらく宗教は個人の問題ですから、そのことの中で何があったのかということをおうとしますと、非常に困難になりますから、そのことを今申そうとするのではなくて、そのような徳川の時代における体制の下に完全に組み込まれた仏教が、実は体制の下に組み込まれることによって、自己の宗教性を放棄していったことがなかったかどうかということです。もし放棄したとすると、仏教は本質のところ、宗教性を失っていったということですから、完全に世俗的な一つの作用しかなくなりました。私は個人個人の問題を言っているわけではなくて、総体的にそう言わざるを得ないと思います。

そうだとすると、前近代の封建体制という社会組織の中に組み込まれることによって、自らの宗教性を放棄したと総体的に言わなくてはならない仏教を見ていて、そして日本が新しい在り方への一步を踏み出そうとしたとき、改めて仏教における宗教性を回復していこうというふうに問いただしていくことは非常に困難なことであり、ある意味では、そのように問いただす意識そのものさえも、もうすでに拒否していくという性格が、私は近代以前の仏教のあり方の中にあつたと一度言い切っておく方が、事ははっきりすると思っております。したがって、日本の近代化の中で近代日本を形成していこうとするとき、その一点は見ないでおこう。徳川の封建体制の下であのような形を取ってきた

仏教というものが、新しい時代の中でどれほどの意味を持つか、というふうに考えるのは、決して無理からぬ考え方だと思います。

ところが、私が申し上げたいと思っているのは、無理からぬ考え方であるけれども、その無理からぬことを越えて確かめをしなかった結果、日本の近代化というものは、そのまま非人間化と同じ事柄として押し進められてきたといわなければならなくなっていると思うのです。もちろん今日では、近代文化総体に対して、日本のみならず世界中の問題として非人間化が大きく問題にされていますが、なかなか、私は日本の近代化の中では、そのことが非常に急速度に非人間化ということと物質文明の促進ということが一つになって動いてきたと思われてならないわけです。そういうことで申しますならば、人間であることを確かめていく一点を見落としてきたわけですから、日本人にとっては非常に不幸なことだったのではないかと思うのです。その不幸なことが今日に至って、やはり宗教、もしくは宗教性という言葉が本来の意味で市民権を持たないまま、一方において非人間化が加速度的に進んでいくという状況をどこで歯止めしていいのかわからないまま動いている。いうならば、日本近代化の悲劇といってもいい、この悲劇を日本人は近代化の促進の中で、自ら招いてしまったのではないか。それを招いた一点を、私は「宗教」、もしくは「宗教性」への見落とし、という言葉で一度言い切っておきたいと思っています。

## 一一

こんなことを申しても、なかなかその辺が、やはり「宗教」あるいは「宗教性」という言葉そのものがすでになじみにくいことになっているのであろうと思います。そのために、私は一人の近代人が、たまたま日本近代の初頭に、仏教における宗教性、なかなか親鸞の仏教における宗教性を徹底して問うて、それを近代人の生活をくぐった近代人の言葉として明瞭にしているということが一つありますのでその人物の言葉を、広い意味で同じような世代をいき

ている人間として共通にうなづくことのできる言葉として、宗教性、特に親鸞の仏教の宗教性が表現されていると考  
えられる言葉だけをご紹介して、そういうことが宗教だと、無理でも本日はそういうこととしてご理解いただいたう  
えで、親鸞について何事かを語る内容をそこで正確かめいただければと思います。

それは清沢満之(一八六三—一九〇三)という人物で、わずかに四〇年という短い年月を生きた一人の近代人です。彼は、  
少なくとも日本の近代の出発においては非常に積極的な近代人でした。その清沢が宗教についてどのような確かめを  
しているか。いわゆる仏教の宗教性をどのような確認をもって表現しているかということですが、まず「宗教とは何  
か」という非常に素朴な問いに対して、「宗教は、人心をして、その根蔕を自覚せしむるものなり」と言っておりま  
す。つまり、宗教とは何かということ、われわれ人間が、お互いに命を共同しながら生き合っている。その生き合っ  
ている平等にして根源的な連帯を自覚することであるという言い方をしています。ですから、近代人である清沢が確か  
めた親鸞の仏教における宗教性の確かめとしての答えは、人間として生き合う平等にして根源的な連帯への目覚めだ  
と切り切るわけです。

「根蔕」という字は根という字と蔕たねという字が一つになった文字ですから、いわゆる植物は、一つの根を大地に張  
ってその上にナスならナスという一つの植物が生育するわけで、そこからナスという果実がなります。そのナスが木  
にひっついているところを蔕たねといいます。ところが、同じ根を持って、その根から栄養を吸収して一つの木にいくつ  
かのナスがなりますが、同じ形をしたナスは一つもない、いろんな形をしています。しかし、形が違うからといって、  
ナスと言えないのかというと、やはりナスです。どこでナスといえるのかというと、蔕たねのところ、一つの木にひっつ  
いているからです。

蔕たねのところ、一つの木にひっついていられるということは何かというと、根っこのところで押さえてみると、命の連帯  
において少々格好が悪いナスやら、円いナスやらがきているのだ。だから、全部ナスだという、簡単にいえば、こ

ういう話です。こういう話で申しますならば、まさに人間が生き合っている、その根源的で平等な連帯への目覚めが宗教だということは随分重要なことではないかと思えますし、そのことが見落とされることによって何がおこるかということは、大体推察していただけるのではないかと思えます。

さらに清沢は、信仰とか、信心とかいうことになる、なかなか厄介なことになりますが、そのことを宗教的信念という言葉で押さえると、どういうことになるかという問いを立てたとき、それに対して答えていると思われる言葉は「吾人の根本的成立を自覚するもの、これを宗教的信念と云う。」と、こう言っておりま。それを、私流に荒っぽく言うと、宗教的信念とは、人間であることを根本的に成り立たしめている事実への目覚めであるということ、何か特別のことについて、びっくりするようなことを考えることではないのだということです。そのことをさらに言葉を変えて、もう一度押さえ直して、「パンの為、職責の為、人道の為、国家の為、富国強兵の為に、功名栄華の為に、宗教あるにはあらざるなり。人心の至奥より出ずる至盛の要求の為に宗教あるなり、宗教を求むべし、宗教は求むるところなし。」と言いました。これだけの言葉を皆様方が念頭に浮かべていただきますとき、皆様方の思いの中に、もし宗教あるいは信心ということ、『鯛の頭も信心から』という感覚のところでもとらえているものがあるとする、この言葉は通用しないのではないのでしょうか。

これは、きわどいギリギリの言葉ですから、いろいろ問題が出ようかと思いますが、私は、確かめとしては正確だと思えます。少なくとも、パン―生活向上のために宗教があるのではない、あるいは職場で働いている限り職場の倫理に従っていかなくてはならない。しかし、その職場の倫理によく従う人間になるために宗教があるのではない。さらには、人間が人間として生きていく限り、人間の約束事としての道徳は守るべきであると、これは一般にそう言われているとおりであろうかと思いますが、そういうことを守れる人間になるために宗教があるのではないのだと言っています。清沢がこのようなことを言っている時期を念頭に浮かべていただくとわかりますが、明治二十七、八

年の日清戦争という、初めて外国と戦って勝ったという表現を取っている戦いと、そして世界の超大国であったロシアとの戦い、明治三十七、八年の日露戦争、これも勝ったと言っていますが、その戦いと戦いとのはざままで言っている言葉が、こういう言葉です。その中で、清沢は、はっきりと、国家のために宗教はあるのではない。ましてや国家が第一の課題としている富国強兵のために宗教があるのではない。あるいは、一人の人間の功名心や、栄華を求める心を満足させるために宗教があるのではないと言っています。こうした表現の全部が、ある意味では人間の諸要求に対して、あるいは人間社会の要求する要求に対して応答するものとして宗教はないのだと言いついていくわけです。そのように言い切って、それでは宗教とは何かというと、人間の根源的な要求に、そして、人間を最も積極的に人間たらしめる要求に応答するもののみ宗教というのだ。だから、人間は、宗教を求めなくては人間になれない。だからといって、宗教は、何事かを求める材料ではないと言いついていくわけです。

このような清沢の言葉を見ると、これがあの時代に語られたということの持っている社会的な側面における問題と、同時に宗教の自立ということを明瞭にしていくときの非常に強靱で明晰な言葉が、先ほど来申している、日本近代化の中の宗教性確認ということの稀薄さの中で見落とされていたのではないかといっても言いすぎではないと思います。このように言うことができるのと、そういう宗教、したがって、宗教的要求によってうなずく世界に目を開いた人間、すなわち宗教的存在とは一体どういう存在か。それは、「自己を知るものは、勇猛精進、独立自由の大義を発揚すべきなり。」という言葉になっていますが、本当の宗教的人間というのは、何か特別なことをするのはなくて、自己なる存在が真に人間であるということに目覚めるといふことなのだと言いついていきます。そのことに目覚めたとき、はじめて自由な独立者として生き切る存在になるのだと、ここまで具体的に事を確かめていきますから、当然偽物の宗教に対しての批判が出てきます。

清沢の目から見て、偽物の宗教と思われる事柄に対しての批判は、「財貨を依頼(たの)めば、財貨の為に苦しめ

らる。人物を依頼めば、人物の為に苦しめらる。我身を依頼めば我身の為に苦しめらる。神仏を依頼めば神仏の為に苦しめらる。其の故何ぞや。「たのむ」心が有相の執心なればなり。之を自力の依頼心と云う。「お金を頼みにするのと、人を頼みにするのと、物を頼みにするのと、さらには私は大丈夫だといって自分を頼みにするのと、それと神や仏を頼みにすることは全部同質であって、それは決して人間を救うのではないのだ。ある意味で救うような装いをもって人間を苦しめるのだと言う言葉になる。こう言い切られたとき、今日の宗教感覚は、随分抵抗状況を引き起こしてくるのではないかと、私は思います。しかし、そこまで言い切ったとき、どうしてそうなるのかということに対して、その「たのむ」という、依頼するという心が、自分が得たいという思いで頼んでいるから、頼まれたものによって頼む心が満ちるということはあり得ないのだ。自分の得したい根性で神、仏を頼めば、神、仏であるかどうかわからないのであって、それは自分の要求を満たすであろう何らかの期待を神、仏という形で表現しただけですから、それによって自分が救われるであろうと思う意識によって自分が苦しむ。これは当然の批判であるわけです。

その当然の批判をきちっと仕切るのは、どこでできるかというところ、まさに清沢においては、宗教における本質的な確認があったからできたのだということが言えると思います。こういうことを、私がくどくどと親鸞の思想に先立って申し上げるのは、このあたりのところを何とかお互いにはっきりさせておきたい。それは決して宗教についてご理解をいただきたいと思っっているのではなくて、部落解放という問題の根底に実は大きく、本当に大きく居座っている課題を見据えていこうとすると、宗教性を問わなかった近代日本人の持っている大きな欠落部分をやはり点検しておかなくてはいけないのではないかと。そして、そのことを改めてわれわれが、もし宗教ということについて先ほど一般的な例で申しましたような認識以外に持っていないとすると、それは宗教ではないのだと否定をして、その否定をはっきりし尽くしたときに、宗教とは人間においてこのようなものなのだという認識を持つことが、私は非常に大切なこと、決して本日の主題に関係のないこととして宗教宣伝をしているのではないということをご理解いただきたい

思うわけです。

そのような、清沢における近代化日本の中での確かめの下でなされている発言が、決して十分に近代化の中でうなずかれ得なかったという事実を否定できないと思います。おそらく多くの、ここにお集まりの皆様方も、清沢満之という名を聞いても、それほど特別な感慨をお持ちにならないという現実が、そのことを物語っていると申したいのではないかと思います。

### 三

ただ、こういう清沢が確かめた宗教という事柄について、その「宗教」という表現をはずしてまで徹底して具体的に、徹底して現実的に、そして徹底して本質的にことを明らかにしているのが、これも非常に大胆なもの言い方ですが、一九二二年三月三日の、いわゆる部落解放運動の出発点といってもいい全国水平社創立という出来事であると、私は考えています。

いわゆる一九二二年三月三日、全国水平社という組織が生まれましたが、あの組織を公開していこうとするときの宣言は「吾々は、心から人生の熱と光を願求礼賛するものである。水平社は、かくして生まれました。人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で結ばれています。まさに、この宣言は、あの徳川の体制、さらには近代化といわれている日本の天皇制下における社会体制の中で苦難のまっただ中を生きていかなければならなかった人々が、人間解放ということをはっきり言葉にしているわけです。いわゆる、われわれを解放しようという表現を取るのではなくて、人間が解放されなくては、われわれの解放という事柄が成り立たない。決して、それは、われわれの解放を成り立たせるために、人間解放を利用するということではなくて、まさに、われわれがなめてきた苦渋というものの持っている意味は何なのか。その意味は、まさに人間解放がない限り、人間という存在の意味というものはどこにもないという

ことなのだ、ということをはっきりさせたのであると思います。

そういう意味では、まさにこの具体的な苦難の中から熱と光を願求礼賛すると言って水平社という名の組織を創立したのは、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で結ばれているように、熱と光に満ちた人間と人間社会の創造のみが唯一の人間としての課題なのだとこのことを言い切っているわけです。私は同時に、格調が高いといわれているその宣言の言葉が、ただ「格調が高い」という言葉だけで誉めそやしておるわけにいかないのが、水平社創立の中で確かめられた綱領であろうと思います。「吾らは、人間性の原理に覚醒し、人類最高の完成に向かって突進する」ということを、三条からなっている綱領の最後に置いています。これは、まさに熱と光との世界、熱と光との人間、そして人間社会の創造を願うというその願求が、単なる夢見る願望ではなくて、きちっと人間性の原理に目覚めて、人類最高の人間世界を闘い取ろうという確信的な実践への宣告なのです。「人間性に目覚めて」と言わなくてはすね。私は、この辺に注意するのです。それは「人間性」という言葉が、今日やたらと使われますので警戒します。しかし、水平社の創立のときに、その綱領として語ったのは「人間性」ではなくて、「人間性の原理」です。逆にいえば、原理的確認として人間性というものを一度きちっと押さえるということです。甘いヒューマニズムというところで流していかない。人間という存在の原理的な事柄として人間性というものを一度押さえて、それに目覚める。その目覚めに基いて、人類の最高のあり方を闘い取ろうというわけです。ですから、これは、はっきりと人類最高の完成に向かって突進するということは、根っここのところでは、人間性ということを原理的に確認していくということと呼応しているわけです。だから、夢とか、希望とか、思いとかいうことではなくて、はっきりと具体的に「人間とは何か」ということを徹底して原理的に押さえるときに、人間の社会というものは、かくなくてはならない、それをはっきりと見据えて、それを完成するために突進するのだと、こういうことが綱領に語られているのです。

私は、水平社創立宣言、綱領、決議の三つを何回か読み合わせていますと、そこに、新たな意味で、先ほど来申し

ていますような宗教性という言葉さえも不必要にして、その本質を明瞭にしていると感じられてくるわけです。

水平社創立宣言の起草者として、西光万吉という方があげられています。清原一隆というお名前の奈良県の真宗のお寺の出身の方です。したがって、仏教、なかならず親鸞の思想の影響が、かなり宣言の中には強くあるのだと説明されています。私は、そのことを否定しようとは思いません。それはそうであろうと思います。ある方からお聞きしましたが、西光万吉氏が、この起草に先だって文章をつくったときは、もっともっと仏教的用語が多かったそうです。それを点検していく中で削っていかれて、こういう文章になったのだと聞いています。

しかし、私が着目しているのはそういうことではなくて、私自身にとっては、最初から私の親鸞観をお話する。私の親鸞観とは、私の生活原理であり、行動原理であるということを示しましたが、そういうことから言いますと、こういう事柄を通して私が着目しているのは、むしろ水平社の創立の宣言と綱領と決議が、逆に私自身に親鸞を見る目を与えてくれたことの方が私には決定的に重要なことです。親鸞の思想が反映しているか、していないかということには、私はそれほど関心はないのです。そうではなくて、少なくとも、私の生活の原理であり、行動の原理であるものが親鸞の思想だと言った私という人間に親鸞の思想、したがって、親鸞という人間のものの考え方の本質を明瞭に見開く目を与えてくれたというところに、私にとつての水平社創立宣言並びに綱領、さらに決議、全体の持っている意味があるわけです。ですから、私は、初めてそういう意味では、水平社創立宣言あるいは決議、綱領を通して親鸞を改めて知ることができるようになったことに深く感謝をしているわけです。

どうしてそんなことが言えるかというと、私がうとくてそういう親鸞を知ることができなかったということがあるとするならば、それはそれでご尤もと言うほかはありません。しかし、今日まで親鸞を、したがって親鸞の思想を伝達してきたであろうあらゆる要素の中で、このような水平社創立という形を取る宣言と綱領と決議というものになるような人間社会完成を目指す行動原理として親鸞並びに親鸞の思想を伝達されたということがなかったからです。私

は、はっきりとそうしか感じ得ないわけです。

親鸞が、いろいろな意味で人間についてどのようなかわりを持ち、どのようにして生き、人間の救済をどのように明らかにしたかということは、いろいろ語り伝えられています。が、こういう具体性を持った事柄が親鸞の仏教、したがって親鸞の思想の中にあるということをきちっと指摘は、ついにされなかったと申して言いすぎではなかったと、私自身思っています。水平社の創立宣言が出るまでは、私は、そういうふうな思想、発想がなかったと言いつても言いすぎではないと考えています。